

- 11) *A Literature of Their Own*, p. 296.
- 12) Introduction to *Three Guineas*, by Hermione Lee, p. xii.

にこの作品を読むことができなかった。彼らにとって時代遅れと思われた議論の多くが、今日の読者に妥当性を持つのは何故か。それはひとつには、私たちにとって既に過去に書かれたこの作品を歴史的視野の下に読み、過去と現在を関連づけるのがより容易であるということ。さらには、ここで議論の根本にある、既存価値に対する不信と、新しい価値の模索という課題が、今日の知の風景の中で、読者にとってより身近に感じられるからであろう。

注

- 1) Robin Majumdar and Allen McLaurin eds., *Virginia Woolf: The Critical Heritage* (London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1975).
- 2) *Ibid.*, pp. 400–1.
- 3) *Ibid.*, pp. 406–8.
- 4) Virginia Woolf, *Three Guineas*, new paperback edition (London: The Hogarth Press, 1986) p. 203. 以下、テキストからの引用は本文にページ数を示す。
- 5) *Critical Heritage*, pp. 409–19.
- 6) Quentin Bell, *Virginia Woolf: A Biography*, Vol.II (London: The Hogarth Press, 1972), p 205.
- 7) Brenda R. Silver, “*Three Guineas* Before and After: Further Answers to Correspondents”, in Jane Marcus ed., *Virginia Woolf: A Feminist Slant* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1983), pp. 260–72.
- 8) Elaine Showalter, *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1977), pp. 293–97.
- 9) Nigel Nicolson ed., *The Sick Side of the Moon: The Letters of Virginia Woolf, vol. V: 1932–1935* (London: The Hogarth Press, 1979), pp. xiv–xviii.
- 10) *Scrutiny* (September 1938), p. 203. 引用は前掲の *Critical Heritage*, p. 409 から行った。以下、Leavis の書評からの引用は CH と記してページ数を本文に示す。

た女性の社会的役割についての考え方に、この世界との共通性を見出している¹¹⁾。確かに、独り編み物をする時の Mrs. Ramsay のように、“the Society of Outsiders” が主観性の内に引き籠もり、その受動的な快楽に至上の価値を見出すとすれば、社会に対する影響力は期待できない。それゆえ “the Society of Outsiders” は社会の周縁という位置からの視野を何らかの形で表現しなければならない。Woolf は甥の Julian Bell に宛てた手紙（1935 年 10 月 25 日）に “all politics be damned” と書いたが、Hermione Lee の言葉を借りれば “all politics be damned” と発言することは無関心の表明ではなく、その逆である¹²⁾。同様に、“the Society of Outsiders” は男性社会に対して全くの “indifference” を決めこもう、と言う時、それはその社会に無関心であるからではなく、その社会の価値観に対決するための積極的な態度の表明なのである。そして、その態度の有効性と必要を訴える TG 自身が、“the Society of Outsiders” の立場を言説という形で表現しているのである。

結 語

この作品は、差異の谷の実体を明るみに出し、それによって差異に基づく新しい世界観を生み出し、差異に基づく協力という橋を架けるために必要な、視点の移動を促す書である。視点を移動させるために、まず ‘we’ と ‘you’ という異なった経験の主体が設定され、それによって中心にいる者の見方を絶えず相対化する周縁からの視点が確保された。その視点からは、中心にいては見えないものが見え、中心にいる者にとって当たり前と思われる事象の背後に、それらをもたらした歴史的経過と社会の構造を見据えることが可能となる。

しかしそういった視点の移動は、社会に直ちに有用なにか作りの橋を作り出さないがために、具体策としては役立たない。Quentin Bell の意見では、そのような視点の移動の必要性を説く議論自体、戦争の危機が迫った社会に対する時代錯誤ということになる。察するに、この作品を批判した当時の知識人たちは、Leavis のように中心からの物の見方に固執したか、さもないと西欧文明の危機に対して即効力のある言動が行われないことに不満を感じたのであろう。いずれの場合にも彼らは歴史的視野の下

男性と同じ立場で社会参加することに対する拒否の態度は、第三部で“the Society of Outsiders”という概念に結晶する。

Elasticity is essential; and some degree of secrecy ... is at present even more essential. But the description thus loosely and imperfectly given is enough to show you, Sir, that the Society of Outsiders has the same ends as your society — freedom, equality, peace; but that it seeks to achieve them by the means that a different sex, a different tradition, a different education, and the different values which result from those differences have placed within our reach. (TG, p. 130)

男たちの行列に失われている柔軟な物の見方をする能力が“elasticity”であり、権力構造の中にからめとられないことが“secrecy”である。ところがもし女性が“outsiders”の思考を失えばどうなるか。

... it seems both wrong for us rationally and impossible for us emotionally to fill up your form and join your society. For by so doing we should merge our identity in yours; follow and repeat and score still deeper the old worn ruts in which society, like a gramophone whose needle has stuck, is grinding out with intolerable unanimity ‘Three hundred millions spent upon arms.’ (TG, p. 121)

‘we’ と ‘you’ が異なるアイデンティティを有するからこそ、異なった視点から世界を眺め、異なった価値観を持つ。それらを認めることが、“elasticity”を失った文明のわだちから抜け出す力となるだろう、という議論である。

最近でも、この“the Society of Outsiders”という概念を現実逃避と見なす批判がある。Elaine Showalter は Woolf の小説世界について語る時、Mrs. Ramsay を念頭において、究極的には自己消滅に至る受容性と、疲弊・不毛に至る創造的統合の世界と言い表したが、彼女は TG に提示され

[The professions] make the people who practise them possessive, jealous of any infringement of their rights, and highly combative if anyone dares dispute them. Are we not right then in thinking that if we enter the same professions we shall acquire the same qualities? And do not such qualities lead to war? In another century or so if we practise the professions in the same way, shall we not be just as possessive, just as jealous, just as pugnacious, just as positive as to the verdict of God, Nature, Law and Property as these gentlemen are now? (*TG*, p. 77)

ここに用いられた ‘God’, ‘Nature’, ‘Law’, ‘Property’ は各々、教会、支配者が支配を正当化するために用いる本質論、法による規定、財産権といった、歴史上女性を社会の周縁に位置づけてきた制度やイデオロギーのことである。この引用中の “jealous of any infringement of their rights” という表現に、Leavis の書評にある “jealously maintaining the highest possible standards” (*CH*, p. 413) という表現を突き合わせてみよう。この “jealously” が *TG* の用法を意識したものかどうかはわからないが、この一語が Leavis の言う文化の擁護とは如何に保守的で排他的な行為であるかをよく物語っていると言えるだろう。

さらに、性差の存在こそが力となり得るという *TG* の議論が、Leavis の書評において無視されている証拠として、最終パラグラフの “equalizing the sexes” と “emancipating women within our culture” という表現を挙げることができる。この二つの表現ほど、*TG* の立場からかけ離れたものはないからである。まず、女性の持つ異なった価値観を重視する議論に対して、“equalizing the sexes” というのは、全く反対の、もしくは制度の上での表面的な変化だけを見る立場である。そして既に述べたように、“within ‘our’ culture” という表現が内包する、単一の (‘our’) 文化という考え方は、‘our’, ‘your’ という二元論と対立し、その文化の内部 (‘within’) での解放は、根本的な価値観を変える積極的な解放とはならない。*TG* のテキストに従えば、ここは恐らく “emancipating us from your culture” となるべきところだろう。

私たちは、この男たちの行列に、モダニストのテキストに現れるもうひとつの行列を重ね合わせて見ることができる。それは *The Waste Land* の一節である。

Unreal City,
Under the brown fog of a winter dawn,
A crowd flowed over London Bridge, so many,
I had not thought death had undone so many.
Sighs, short and infrequent, were exhaled,
And each man fixed his eyes before his feet.
Flowed up the hill and down King William Street,
To where Saint Mary Woolnoth kept the hours
With a dead sound on the final stroke of nine.

TG に描かれる男たちの行列は、これほどまでに打ちひしがれた様子をしてはいない。むしろ威厳をもって、自らに課された責務を全うする男たちの行列である。だがいずれも読む者に、その行列の中に入って行進することの意味を問いかけてくる。いずれも個人としての人間性を欠いた者たちが、その行進の意味も目的も問わずに歩を進めている図だからだ。*The Waste Land* に描かれた、この人間らしさも自由意志も失った者たちの行列は、TG において示される男性社会の図と重なり合うものである。

そんな男たちの行列に、女たちがついて行くべきかどうか。この問いは、性差を超越すべきか、或いは性差の存在こそ文化の活性化に欠かせないものとなり得るのか、という問いであり、男性社会の中での平等を実現すべきか、別個の価値体系を主張すべきか、という戦略上の問題でもある。この、今日もなお重い問いを扱っているテキストに、時代錯誤と現実認識の欠如という批判を加えるのは、今日の読者にとって根拠の乏しいものと思われるはずである。

さて、‘we’ が ‘you’ の行列に加わるべきかについて、TG が示す答えは「否」である。

がそのせいで弱まっているとは思えないのも確かだ。

さて、権力を行使する側にある男性が築き上げてきた文明が、毎朝都市の中心に流入する男たちの行列に象徴されているわけだが、その行列を19世紀までの女たちは窓から眺めるだけであつた。しかし女性に収入を得る道が開かれた今、女性にも男性と同じように権力を行使する道が開かれたことになる。そこで女たちは自問しなければならない。男たちの行列の後についていってよいものかどうか、その行列は一体どこへ向かっているのかと。

We are here, on the bridge, to ask ourselves certain questions. And they are very important questions; and we have very little time in which to answer them. The questions that we have to ask and to answer about that procession during this moment of transition are so important that they may well change the lives of all men and women for ever. For we have to ask ourselves, here and now, do we wish to join that procession, or don't we? On what terms shall we join that procession? Above all, where is it leading us, the procession of educated men? (*TG*, p. 72)

ここには、西欧社会が何に向かって進んできたのか、またこれから進もうとしているのかという痛切な問いが暗示されている。第二次大戦前夜の西欧文明に対する強い危機感が、権力者に対する失望、既成の高等教育に対する失望を生み、このような疑問を提出する動機となったと察せられる。*A Room*との違いとしてよく指摘されるユーモアの欠如は、この未来に対して楽観できない文明観のためであろう。

Let us never cease from thinking — what is this “civilization” in which we find ourselves? What are these ceremonies and why should we take part in them? What are these professions and why should we make money out of them? Where in short is it leading us, the procession of the sons of educated men? (*TG*, p. 73)

先の引用には、女性が自らに課されるべき義務を回避しようとしているのに、男性は高い教育を受けたことを正当化できるような責任、義務を遂行しているのだ、とある。この指摘とは対照的に、“Arthur’s Education Fund” に象徴される、金のかかった教育を受けて権力を手に入れた男性の集合体を、TG は次のように描いている。

There they go, our brothers who have been educated at public schools and universities, mounting those steps, passing in and out of those doors, ascending those pulpits, preaching, teaching, administering justice, practising medicine, transacting business, making money. It is a solemn sight always — a procession, like a caravanserai crossing a desert. Great-grandfathers, grandfathers, fathers, uncles — they all went that way, wearing their gowns, wearing their wigs, some with ribbons across their breasts, others without. (TG, pp. 70–1)

聖職者、教授、裁判官、医師、実業家——彼らは権力を行使できるし、またそのために弱者に対して抑圧を行なうことのできる者たちとして扱われている。閉鎖的な教会と St. Paul についての再三の言及、いかめしい顔付きで行進する教授、裁判官、聖職者の写真、そして注に引用された彼らの発言の取り扱い方は辛辣である。さらに読者は、*A Room* に現れた Professor von X, *Mrs. Dalloway* に登場する Dr. Holmes, Dr. Bradshaw に体现された、教授や医師の行使する権力への批判を思い出すことができる。ただ実業家についての言及は、テキストの他の部分に見当たらない。軍備に年間 3 億ポンドが使われることへの言及は何度もあるが、さてその金で潤っている人間や組織の行使する権力については洞察がない。経済構造と権力の関係という、権力の問題を考える上で根本的な点が欠落していると言える。これが TG の限界を示していると言えるかもしれない。しかしこの作品が目指すのは、科学的な分析ではなく、社会に異質の視点を投入することによって新しい世界観を作ろうというものであるから、全ての抑圧の因子に相応の目配りがなされていないからといって、言説の力

く性格を異にしている。

ところが、有閑階級の女性という Woolf 像に執着する Leavis の書評は、TG の女子教育に関する主張について、女性が男性の果している社会的義務は背負わずに、女性の特権も放棄することなく、男性と同等の教育機会を得ようとするものだ、と攻撃する。ここで女性の特権とは、後述する“outsider”としての特権ではなく、有閑階級としての特権のことである。

But I have passed over Mrs. Woolf's plan for the complete emancipation of women of her class from the prison-house she considers every part of the home other than the drawing-room to be. To judge from *Three Guineas* Mrs. Woolf wants the women of her class to have the privileges of womanhood without the duties and responsibilities traditionally assumed by them, and to have the advantages of a man's education without being subsequently obliged, as nearly all men are, to justify it. (CH, p. 415)

Woolf にとって客間以外の家庭空間、即ち伝統的に女性が家事を行ってきた空間は全て牢獄と見なされているということだが、これは Woolf の言う文化が所詮は“dinner-tables and drawing-rooms” (CH, p. 415) の富裕階級の社交から生まれる文化にすぎないという見方からきている。しかし、*A Room of One's Own* において、その中心主題となっていたのは、女性が西欧近代において私的な時空間を奪われてきたことであつたし、中でも客間は、Jane Austen をはじめとする女性作家たちが人々の性格や言動を観察する格好の場であつたと同時に、女性を男性社会の要求する女性像の枠内に閉じ込めた、最も牢獄に近い場と見なされている。*A Room* が問題にしたのは、家事への隷属ではなく、社会のコードへの精神的隷属であつた。そして TG も、この視点を踏襲しているのである。Leavis の書評が、抑圧の構造を持った最小単位として家庭を見る視点を共有していないのは、ここに明らかである。

しかし、書評の視点と TG の視点がより大きな食い違いを見せるのは、教育を受けることによって担うべき社会的責任についての考え方である。

この谷の深さ、それが穿たれていった歴史的経緯、谷の兩岸から見える風景の違いを追究することによって、読者に差異の谷というものの存在の重さを説得するのである。

ここで扱われる差異は、制度の上で解消すれば全てなくなるような性質のものではない。

... both the Army and the Navy are closed to our sex. We are not allowed to fight. Nor again are we allowed to be members of the Stock Exchange. Thus we can use neither the pressure of force nor the pressure of money. The less direct but still effective weapons which our brothers, as educated men, possess in the diplomatic service, in the Church, are also denied to us. We cannot preach sermons or negotiate treaties. Then again although it is true that we can write articles or send letters to the Press, the control of the Press — the decision what to print, what not to print — is entirely in the hands of your sex. It is true that for the past twenty years we have been admitted to the Civil Service and to the Bar; but our position there is still very precarious and our authority of the slightest. Thus all the weapons with which an educated man can enforce his opinion are either beyond our grasp or so nearly beyond it that even if we used them we could scarcely inflict one scratch. (*TG*, p. 15)

ここでは女性の社会からの疎外が具体例によって示されている。しかしそれならば、男性に牛耳られている職業分野をそのまま女性に開放せよ、と主張しているのかというと、決してそうではない。ここに挙げられた、軍隊、金融、外交、教会、言論、司法は全て抑圧のための手段として利用できるものであり、実際、*TG*の本文と注は、抑圧の手段として利用されてきた例を列挙するのに怠りない。そういう性格を持った職業分野に、男性と同じ立場で入ることに対する疑問を、テキストは繰り返し喚起するのだが、そこで展開される議論は、当然のことながら単純な機会均等論とは全

for three years and more I have been sitting on my side of it wondering whether it is any use to try to speak across it. (*TG*, p. 6)

ここで思考のたゆたいを示すために用いられた省略符号は、現実の困難さを確認するためのレトリックとしてテキストの中で何度か用いられている。ここで直面する困難とは男女の間に横たわる差異の谷のことであるが、この谷を穿ったものは、教育機会、職業機会、財産その他の不均等であると説明できる。だがテキストは、むしろそのような不均等が育んだ‘we’と‘you’の世界観の相違という、統計学的に数値化できない力の大きさを強調する。

It was a voracious receptacle, a solid fact — Arthur’s Education Fund — a fact so solid indeed that it cast a shadow over the entire landscape. And the result is that though we look at the same things, we see them differently. (*TG*, p. 7)

Indeed the more lives we read, the more speeches we listen to, the more opinions we consult, the greater the confusion becomes and the less possible it seems, since we cannot understand the impulses, the motives, or the morality which lead you to go to war, to make any suggestion that will help you to prevent war. (*TG*, p. 13)

It would seem to follow then as an indisputable fact that ‘we’ — meaning by ‘we’ a whole made up of body, brain and spirit, influenced by memory and tradition — must still differ in some essential respects from ‘you’, whose body, brain and spirit have been so differently trained and are so differently influenced by memory and tradition. Though we see the same world, we see it through different eyes. (*TG*, p. 22)

‘we’ と ‘you’ の間に横たわる谷の深さは、このように繰り返し確認される。

‘you’ という他者の支配する社会の中で抑圧される者と思なすだろうか。そして男性読者ならば、‘you’ という抑圧する者として語りかけられ、批判される立場になって読むのだろうか。いや、この‘we’ と ‘you’ は、そのような単純な同一化を成立させるものではないだろう。読者は男女を問わず、自らの価値観が無批判に常識的な（即ち社会のコードに沿った）考え方の習慣に流れていることを改めて自覚するように仕向けられているのである。他者を想定しない均質の‘we’ によって語られる社会観に慣らされた精神にとっては、たとえば“our culture” といった考え方に潜む異質なものに対する排除は、なかなか見えてこないものである。TGは、‘we’ と ‘you’ を設定することによってはじめて可能となる視座から、社会の現象の背後にあって常には見えない構造に、読者の眼を向けさせる。そして社会のコードに従った考え方や価値観を揺さぶるのである。

第3章 差異と同一化の問題

前章で考察した‘we’ と ‘you’ の間の差異には、時の流れによって刻まれた深い谷という比喩が用いられる。手紙の主‘you’を描写した後のテキストの続きを見てみよう。混乱を避けるために付け加えておくが、次の引用に現れる‘we’は、テキストで主に使われているような、‘you’に対する“educated men’s daughters”を指すのではなく、手紙の主‘you’と‘I’の相方を指す。だからこの‘we’も暗黙の合意を示す‘we’ではなく、差異を内包した‘we’である。

We both come of what, in this hybrid age when, though birth is mixed, classes still remain fixed, it is convenient to call the educated class. When we meet in the flesh we speak with the same accent; use knives and forks in the same way; expect maids to cook dinner and wash up after dinner; and can talk during dinner without much difficulty about politics and people; war and peace; barbarism and civilization—all the questions indeed suggested by your letter. Moreover, we both earn our livings. But ... those three dots mark a precipice, a gulf so deeply cut between us that

異成分からなる (heterogeneous) 社会を認めることを意味する。TGにおいて、一義的には 'you' は父権制社会の中心に位置する男性であり、'we' はその社会の周縁に位置する女性である。しかし第三部において明確にされるように、'you' と 'we' の差異は、その一義的な意味に固定されない。

You are feeling in your own persons what your mothers felt when they were shut out, when they were shut up, because they were women. Now you are being shut out, you are being shut up, because you are jews, because you are democrats, because of race, because of religion. (TG, p. 118)

ここにおいて、'we' と 'you' は人類の差異と抑圧の歴史を語るための二つの代名詞となるのである。'we' が何であれ抑圧される立場にある者の声を代表するとすれば、'you' は抑圧する側の声を代表する。この 'we' と 'you' に様々な一対をあてはめることによって、差異は顕在化され、増殖するだろう。一義的な意味において中心に位置していた 'you' は、ここではもはや中心にはいない。'you' が周縁に位置する、つまり 'we' の側に立つ可能性を想定することによって、'you' と 'we' の中心⇄周縁という関係が絶対のものではなくなる。つまりその関係は、西欧近代という特定の地理的・時間的条件の下に生まれた社会が持っている構造にすぎない。歴史上の急激な変化によって、'you' が 'we' と同様の立場になり得るということ、この発想の転換は柔軟な想像力の賜物である。それは読者に 'you' と 'we' の差異についての常識的な見方を見直させ、現状を歴史的視野の下に相対化して見るよう促す。

このように TGにおける 'we' と 'you' の使用は、世界が差異によって成り立っているという認識に読者の眼を向けさせ、その視点から社会の構造を見直すための戦略なのである。

ところでここで問題になるのは、読者がその性別によって、'we' と 'you' の呼びかけに対し、そのどちらか一方に同一化して TGを読むかどうかという疑問である。つまり女性ならば 'we' の立場に立って、自らを

解は、読者がまず匿名の‘I’と‘you’の機能という、議論上の戦略を受け入れることにかかっているわけだ。

さて、この‘I’は、しばしば‘we’の中に埋没する。この‘we’は、‘you’の視座が父権制社会の中心にあるものとして、その社会の周縁に視座を据えたものとしての‘we’である。そして‘I’は、その一員として、周縁という位置から世界を見直そうという立場で発言するのである。それに対し Leavis の書評に現れる‘I’は、学問の最高水準を誇る大学に属する知的エリートこそが文化の最も優れた擁護者である、という彼女自身の自負に満ちている。だが、TGが疑問に付したのは、まさにそのような権威の価値と正当性ではなかったか。

TGの議論は、‘I’、‘you’、‘we’の間に成立する力学を前提に展開される。Leavis の書評がこの三つの人称代名詞の担う意義と各々の間に成立する力学を理解していない、或いはしようとししない証拠は、“our culture”

(CH, p. 419) という表現にはっきりと見てとれる。この書評は“our culture”の擁護者という立場から書かれているのだが、この“our”とは一体誰を指すのだろうか。その“culture”とはどんな文化なのか。端的に、それは既存の社会秩序に支えられ、もっと具体的に言えば当時の Cambridge 大学によって専門的に研究され、特権的地位を与えられていたような文化のことである。その学問の府において教えられるべきことは、“the ability to discriminate, judge and reject” (CH, p. 413) と表現されている。“discriminate”, “judge”, “reject”——いずれも、異端を排斥し、権威によって判断を下し、中心と周縁を形成するための仕組みを表す言葉ではないか。この言明は自覚された独裁者のパロディなどではない。この書評自体が抑圧の構造の上部に視座を据えているのだ。そこでは知は権力と結びつき、既成の秩序を強化し、異質なものを排斥または抑圧するために使われる。では、その文化の保持者とみなされる‘we’とは誰か。この‘we’は‘you’という他者の存在を認めない。この‘we’は、社会的合意を当然のこととして語る主体である。異質なものを認めない、均質の (homogeneous) 社会を前提とする‘we’——それは権力を持つ者が使用する‘we’である。

それに対し‘we’と‘you’の両立は、差異の存在を確認することであり、

Scrutiny を主宰する Q. D. Leavis 個人の立場で使われている。Leavis の書評に見え隠れするこの 'I' は、*Scrutiny* 派知的エリート集団の中心という、歴史的地理的一点に位置する特定の個人の立場を堅持して発言するのである。

Leavis は現在の自己の地点に固執する余り、TG の匿名性に支えられた、歴史を内包した 'I' の視点を共有することができない。それゆえ攻撃は、TG が展開する議論とは異なった次元の、個人攻撃となる。

It is no use attempting to discuss the book for what it claims to be, which is a sort of chatty restatement of the rights and wrongs of women of Mrs. Woolf's class, with occasional reflexions where convenient on the wrongs of other kinds of English-women. Mrs. Woolf, by her own account, has personally received considerably more in the way of economic ease than she is humanly entitled to, and as this book reveals, has enjoyed the equally relaxing ease of an uncritical (not to say flattering) social circle; she cannot be supposed to have suffered any worse injury from mankind than a rare unfavourable review. (CH, p. 410)

Woolf が実際に個人として、貧困と差別に苦しんだ経験があったかどうかは、ここで私たちの関心を引くことではない。Leavis が展開するのは、そんな経験がなければ、作者は他者の貧困と差別について書く立場にない、という議論である。しかし、社会の抑圧の構造を見据えようとする TG の視座は、作者個人の経験とは関係なく存在するものである。作家に個人的経験の有無に関わらずそういった視座を築く能力があることを認めないのは、批評家の態度として誤っているのではないだろうか。

Leavis の書評は、あくまでも作者 Woolf を現実から逃避した有閑階級の人間に限定して、その作者像を語り手 'I' と重ね合わせることを前提として、TG の内容を批判している。ところが、その批評自体が、そのような前提によって歴史的社会的視野を失い、知的エリートの立場から見えるものの内に閉じ籠っている。このことからわかるように、TG の内容の理

TGの、一見いかにも小説家にふさわしく、正面から論じるのを嫌って虚構化されたような書き出しは、以上のように、匿名性を獲得するという、そして後の議論の伏線を敷くという重要な機能を果たしているのである。

さてここで、Q. D. Leavis の書評に戻って、その導入部を TGと比較してみよう。

This book is not really reviewable in these pages because Mrs. Woolf implies throughout that it is a conversation between her and her friends, addressed as she constantly says to 'women of our class', though bits of it are directly and indirectly aimed at those women's menkind.¹⁰⁾

まずこの書評によれば、TGは Woolf 言うところの“women of our class”，即ち経済力のある家庭の女性にのみ語りかけているから、この作品はその階級に属さない者を排除する私的会話にすぎない。それゆえ *Scrutiny* の紙面を割いて取り上げるにふさわしいものではない、という。ここで取られるポーズは、書評の作者がその階級に属する者ではないので会話に加わっていない、というものである。

Mrs. Woolf would apparently be surprised to hear that there is no member of that class on the contributing list of this review. (*CH*, p. 409)

これは *Scrutiny* の書評家一般についての言及であるが、読者に与える印象としては、Leavis 自身がその階級の一員でないことが強調される。つまりこれは、作者 Woolf と「私」との間には相互理解に達するための共通の場がないという立場の表明であり、TGのテキストに正面から向き合い対話する姿勢を拒絶するものである。

ところで、今用いた「私」という人称代名詞であるが、これが TGの場合に匿名性を帯びているのは先ほど見た通りだ。それに対して Leavis の書評中の 'I' は、Cambridge 大学の教員であり、F. R. Leavis と共に

つまりは既存の社会秩序を支えている構造に目を向けない限りは、新たな展望は見えてこないということを、テキストは繰り返し強調するのである。

手紙の主を小説の登場人物のように描くという操作についてであるが、‘you’ は先ほど見たように、虚構化によって、現実にかにもいそうな人物の輪郭を与えられる。そしてそれにより、逆説的に現実社会に実在するある個人ではなく、その典型的な輪郭が示唆する社会的位置にある人々の全てを指すことになる。つまりこの‘you’ は単数であると同時に複数でもあるのだ。そして、その‘you’ に語りかける「私」という主体も、作者 Virginia Woolf ではなく、そういう地位にある男性に意見を求められた、現在かなりの社会的地位を持つに至った女性という、匿名性を帯びることになる。今、「かなりの社会的地位を持つに至った」という、時の経過を内包する表現を使ったが、それは Woolf 自身が当時、作家として確固とした地位を築いたという個人的経緯を指すのではなく、19 世紀からの女性解放運動と社会の変化によって、十分とは言えないまでも女性の地位が向上したという、歴史的経緯を指すのである。

But one does not like to leave so remarkable a letter as yours — a letter perhaps unique in the history of human correspondence, since when before has an educated man asked a woman how in her opinion war can be prevented?... (TG, p. 5)

このように TG は書き出しから、ある個人的な背景と経歴を持った作家 Woolf の個人的な声で語られるのではなく、匿名の女性の声で語られるのである。そしてその声は少なくとも本文テキストにおいては終始保たれている。これはちょうど *A Room of One's Own* の語りが、虚構の‘I’を語る主体として選ぶことによって、匿名性を獲得し、作家 Woolf という特定の個人の視野ではなく、女性共通の視野で物を見るという立場を取ったのと似ている。ただし、*A Room* の場合の‘I’は頻出する‘one’にしばしば取ってかわられるのだが、この‘one’という代名詞の性格が曖昧であり、従って、TG の‘I’ほどには社会的立場をはっきりとさせていないと考えられる。

社会環境の中で見えてくるものだけが‘I’にとって問題にできるものなのである。

そこで‘you’を描写するのに使われた表現を概観すると、それらは一見、社会的にかなり高い地位に生きる男性の典型的な、むしろありふれた描写として、何げなく用いられているように見える。しかし、それらが実は‘you’の本質的な属性ではなく、社会の構造によってもたらされたものであることが、後のページで次々に明らかにされていく。

例えば‘you’は、法律家とされているが、これは当時の女性に対して閉鎖的な職業分野のひとつであったばかりでなく、テキストに挿入された裁判官の写真も示唆するように、法曹界の体質が権力による抑圧の顕著な例を示していると後の部分で指摘される。また‘you’の表情に、「ひからびた、けちくさい、不満そうなところがない」という表現も、‘you’自身の快活な性格を示すものでありながら、同時にその前文にあるように、それを保障してくれる経済的ゆとりがあったからこそ、ということになる。

「ひからびた、けちくさい、不満そうな」とは、*Mrs. Dalloway*に登場する Miss Kilman を連想させる表現である。が、TGを読む過程で、この時点での読者は、けちくさくない云々という描写を、成功した男性の属性として当然と感じるかもしれない。しかしこれは、TGの第二部で扱われる問題の伏線となっているのである。つまり、女性に職業機会を与える運動を進める団体からのアピールの形を取って、女性が経済的自立の為に働いても最低限のゆとりもままならない場合が多いのは何故か、という問題につながっていくのである。そこで読者は第二部に至って、先ほどの男性の描写を当然と感じた自分の見方を顧みることになる。同様に、土地を所有していること、有名私立校と Oxford 或いは Cambridge で教育を受けたことも、後のページで、女性が経済的自立と教育を受ける権利を奪われてきた歴史に読者の眼が向けられることによって、平凡な事実の様相を失う。テキストは徐々に、‘you’が当然のこととして享受してきた権利の性格を読者に疑問視するように促していくのである。

このようにして、‘you’の平和主義者としての活動、戦争への懸念、何らかの行動を起こそうとする姿勢は評価できても、その活動が既存の男性中心社会の中で行われる限り、そして‘you’の生活を保障しているもの、

る。テキストはまず、‘I’に戦争を防ぐにはどうしたらよいかを尋ねてきた男性である‘you’の年齢、職業、経済力、社会的地位、学歴を規定することから始まる。この部分は、後の議論の展開に重要な要素を多く含んでいるので、長くなるが引用しておこう。

Without someone warm and breathing on the other side of the page, letters are worthless. You, then, who ask the question, are a little grey on the temples; the hair is no longer thick on the top of your head. You have reached the middle years of life not without effort, at the Bar; but on the whole your journey has been prosperous. There is nothing parched, mean or dissatisfied in your expression. And without wishing to flatter you, your prosperity — wife, children, house — has been deserved. You have never sunk into the contented apathy of middle life, for, as your letter from an office in the heart of London shows, instead of turning on your pillow and prodding your pigs, pruning your pear trees — you have a few acres in Norfolk — you are writing letters, attending meetings, presiding over this and that, asking questions, with the sound of the guns in your ears. For the rest, you began your education at one of the great public schools and finished it at the university.
(TG, pp. 5–6)

ここで手紙の主は小説の登場人物のような社会的輪郭を与えられている。このような操作の果たす機能は、まず、この‘you’を社会的輪郭で限定することによって、このテキストがどういう社会的地位にある人々を議論の対象として、また潜在的読者として想定しているかを示すことにある。具体的には‘I’も‘you’も知識人階級として規定され、その階級の代弁者として発言するものとされる。知識人階級という定義は、経済力による階級区分と矛盾することなどから問題があるが、少なくともこのように規定することによって、TGの主張が全ての人々の思いを代弁しているといった普遍性信仰を捨てた構えを見せていることは確かだ。‘I’と‘you’が属する

TGが主張する女性の態度が、如何にも現実離れしている、という批判がある。また、TGが議論の根本に据えている男女間の差異というものが、現実にはそれほどあるわけではないし、女性も暴力と自己中心的生き方を愛する、という批判ないし女性読者からの告白という形での否定がある。更に、TGが持ち出す統計資料は不正確であるゆえに、それに基づいた議論には論拠がないと批判するものもある。

ここで眼を最近の批判に転じてみると、当時あった批判を踏襲しているものが多いのに驚かされる。Elaine Showalter が Woolf の現実逃避を批判するのに Q. D. Leavis の書評を援用しているのが、その顕著な一例である⁸⁾。また Woolf の書簡集の編者である Nigel Nicolson は、Quentin Bell の言う現実無視という批判に同調し、また当時の読者同様、女性も母として男性に劣らず抑圧的に振舞い、好戦的であると指摘している⁹⁾。

このように TG に対する批判の内容は当時も今もあまり変わっていないのである。そこでその批判について考えてみると、それらは実は批判というよりも、TG の提示する見解と相容れない見解を述べているのにすぎない場合が多いように思われる。それはむしろ、この作品を読み、それに対する批判を書く行為が、その書き手の依って立つ場を暴け出させている、といった具合である。TG はそのように読者自身の持つイデオロギーを明らかにするよう促す性質を持っていると思われるのだ。

そこで、TG に対する批判の性質を分析することが、TG の言説の性質を理解する手掛りとなるのではないかと考える。次章以降で具体的にとる方法としては、Q. D. Leavis その他の TG についての言説を取り上げて、それらを TG と対照させ、解体することになろう。書評や批評を分析することによって、それらが扱っている作品の価値を知ることができるか、という疑問については、この場合、書評も TG という作品も、言説分析という方法に対して同等の対象となり得ること、一方の言説の性質が、他方の言説の性質を照らし出してくれるだろうことを期待するものである。

第2章 語る主体の設定について

TG は、ある男性からの手紙に対する返事の形を取っている。そこで返事を書きつつある者は 'I' で示され、差し出し人の男性は 'you' で示され

権威を空洞化する論法の鋭さを評価している)、それについてここで確定することはできない。ただひとつ確かなのは *TLS* も Greene の書評も、前半の積極的な評価と後半の批判が奇妙な不連続性を示しているということだ。前半で美点をほめ上げて、後半で欠点を指摘するのが書評の常道であることを考慮してもである。この不連続性から、当時の知識人の困惑ぶり、*TG* の過激さが彼らを攪乱し判断をためらわせた様子を窺い知ることができよう。

こういった評価と批判或いは無理解が奇妙に同居する反応の他に、頭から攻撃の構えをとっているものがある。典型的な例は *Scrutiny* に載った Q. D. Leavis の書評である。この書評も *TLS* の遠慮がちな指摘同様、*TG* が現実を無視していること、上・中流階級の女性しか視野に入れていないことを攻撃的にする。中でも大学教育についてなされた提案を幾つか取り上げて、それらに対して、揚げ足取りと言えなくもない程、執拗に具体例を挙げて反論している⁵⁾。また批判の内容は異なるが、*TG* の議論が現実から離れているとみなす点で同様なのが Quentin Bell の *Biography* である⁶⁾。Woolf の甥に当たる Bell が、*TG* 発表当時に自分が持った感想として述べるのは、女性の権利に関する問題を、ファシズムと大戦の危機に重ね合わせて論じることが、不適當であるばかりか、その時代の逼迫した状況は無視する行為であった、という見解である。また同じ伝記中には、Woolf が失業中の一女性から受け取った手紙の中に、*TG* には生活の為に働く女性の立場が反映されていないという批判があったことも言及されている。

Brenda R. Silver は *TG* に対する当時の一般読者の反応について調べているが⁷⁾、それによれば、この作品が彼らを強く刺激したのは確かなようである。夥しい数の感想の手紙が Woolf の下に寄せられた。Woolf 自身の手によって、同時代人の心理を知る格好の材料として残されていたそれらの手紙を Silver は分析している。彼女は読者の反応を幾つかの傾向に分けているのだが、ここにそれらを簡単にまとめてみよう。まず *TG* によって励まされたことに対する感謝を表したものが挙げられる。その多くは女性読者からのものである。次に、社会に影響を及ぼすべく行動する女性の眼から見て、男性原理に基づいた行動への意図的な不参加という、

いない、といった不満を遠回しに述べている。そして *TG* において社会の構造に原因が求められている問題は、実は男女間に本質的に存在する普遍的な状況なのではないか、と指摘することによって、暗に Woolf の問題の扱い方を疑問視しているのである²⁾。

また *Spectator* に書いた Graham Greene も、Woolf の作品全般に対して幾分軽蔑的な扱いをしてはいるが、*TG* については、明晰な論の展開の仕方を評価している。しかし彼も書評の後半部で、Woolf の倫理観、宗教観を狭隘なものとして批判している³⁾。ただしそれが、*TG* の議論の性質を言い当てたものかどうかは疑問である。Woolf の議論が、Greene の倫理観、宗教観と相容れないものであったことの現れとも考えられるからだ。そこで、Greene が批判するために *TG* から引用した箇所を見てみよう。

That such laws exist, and are observed by civilized people, is fairly generally allowed; but it is beginning to be agreed that they were not laid down by “God”, who is now very generally held to be a conception, of patriarchal origin, valid only for certain races, at certain stages and times⁴⁾

この箇所は作品の本文に付けられた注の一部で、Sophocles の劇中に現れる Antigone の言葉に託して、女性はいちじんの抑圧的な秩序に対抗して、自発的な秩序を模索する必要があると訴えている。ここでは神の存在という問題が扱われているのではない。宗教が、その本質はどうあれ、ある時代の、ある社会の制度として機能してきたこと、特に西欧近代社会では、父権制を擁護する道德律として、特に女性に対して抑圧的に働いてきたことを問題にしているのである。しかし Greene は、神の問題を英国国教会という制度にすりかえて論じていると批判する。また *TG* が従来の用法を転倒させて用いている “Chastity” という語についても、*TG* の訴える精神的 “Chastity” に対して、何故肉体的 “Chastity” が等閑にされるのかわからない、とも述べている。これらの批判が、宗教観の違いによるものか、それとも *TG* の論法に対する無理解によるものか（しかし書評の前半部は、

Three Guineas における差異の力学

野 口 祐 子

序 章

Virginia Woolf は生涯にわたって多数のエッセイを書いた。その中で *A Room of One's Own* と *Three Guineas* は、その作品としての規模と内容から言って、作者の執筆当時の思想を知るための信頼できるテキストと言えるだろう。しかしこの二作品の価値は、単に Woolf という一作家の思想を知る上で重要な手掛りとなることに留まらない。両作品では、社会的なテーマを扱うに際し、表現が注意深く選択され、読者に与える効果が綿密に計算されている。この二作品はそういった点で、社会に向けて発言する際の言語的戦略について、多くを教えてくれる作品でもある。そこでこの小論では、両作品のうちで、社会通念に対してより挑戦的な内容ゆえに、賛否両論を巻き起こした *Three Guineas* を取り上げて、その言説の性質について考察したい。特に、差異を中心概念として、また戦略として用いた論の展開の仕方に焦点を絞って論じるつもりである。

第1章 発表当時の反応

*Virginia Woolf: The Critical Heritage*¹⁾の序文によれば、*Three Guineas* (以下、TGと略す) は、発表当時、概して好意的に受け入れられたらしいが、Woolf の周囲の人間を含め、多くの知識人を困惑させたのもまた事実である。*The Critical Heritage* には、この作品に関する6つの書評が収録されているが、それらが当時の知識人の反応を反映しているとすれば、それは大きく2つに分けることができる。

まず *Times Literary Supplement* の無記名の書評は、前半で機知に富んだ文体やアイロニーといった Woolf の持ち味を作品に認め、“the most brilliant pamphleteer in England” と持ち上げているのだが、後半になると、Woolf の主張が社会の現状に合わない、中産階級の立場しか考えて